

日本サムスンの誕生

— 1990年代 —

サムスンにとって、1990年代は激動の時代となった。93年、李健熙(イ・ンヒ)会長が「新経営」を宣言。改革の号令が鳴り響いた。

早速、日本でも変化が起こる。サムスンジャパンやサムスン電子ジャパンなど分散していた関連会社の拠点を東京・日本橋浜町に集約することが決まったのだ。

組織を一カ所に集めて徹底して無駄を省き、シナジー効果を上げる。新経営で提唱された「複合化」の哲学を、日本でも実践する形となった。

統合への第一歩

統合が完了すれば、世界有数規模の海外法人となる。それだけに、これまで事業も業務プロセスも異なっていた社員を一つに束ねるのは、それほど容易なことではなかった。

例えば、商社業務を主とするサムスンジャパンは個人がノウハウを持ち、独立

部隊として動く傾向が強いサムスン電子ジャパンはチーム全体で目標を共有し、業務に対応する。

お互いの方法論を学び、長所を吸収するため、96年秋に統合チームを設置。その第一歩は、全社員の業務プロセスの洗い出しだった。

徹底したボトムアップ

自分の担当業務をA4サイズの紙に書き出し、内容業務の流れ、指揮系統まで細かく記入。全社員の用紙を持ち寄って並べると、業務全体の流れ、無駄が一目で見渡せた。用紙は何千枚にも及び、作業には半年を要した。

「誰がどんな仕事をしていけるかが明確になり、相互理解につながっただけではありません。どこに人員が必要か、逆に過剰かなどの課題も浮き彫りになりました」と、当時を知る社員は話す。

統合は、徹底したボトム



日本サムスンが1998年に設立された

アップで行われた。仕事の効率化、標準化を目指して現場で話し合いを重ね、「ウチはこの方法で業績をあげた」と成功例を披露する。

業務形態は違っても、元は同じサムスンの仲間。「サムスン家族」という言葉があるほど、いざというときの結束は固い。コンピュータシステムの統合にも乗り出し、一つのサムスンに向けてすべての社員が動いていた。

しかし何より難しかったのは、無意識に「変化」を恐れる社員たちの心の改革だったと、元統合チームのメンバーは言う。

「現場の社員の意識が変わらなければ、いくら業務プロセスやシステムを変えても意味がありません。統

合に向けて全社を変えていくには、まず自分が変わらなければ。その意識を共有するため、変化管理の合宿まで行いました」

折しも韓国では97年にIMF危機が起こり、改革への波が大きく動き出していた。統合チームを中心に誰もが多忙を極め、徹夜の作業が続いた。

実務の統合を進める過程で、社員同士がノウハウを共有し、絆を深め、誰もがサムスンの一員との思いを強くした。

98年、満を持して日本サムスンが誕生。名実ともに一つとなり、新世紀へと向かって進んでいく。

90年代に入ると、日本の拠点は日本橋浜町に集約



一筆お礼まで

過ぎ行く夏の余韻にひたることもなく、秋が舞い降りてしまいました。日本の四季を初めて体験する「地域専門家」たちには、移りゆく季節の変化が殊更美しく感じられるようです。

サムスンの地域専門家制度は、サムスンと現地社会との絆を強く深く結ぶ人材を育成するため、1990年に始まりました。グローバル企業として、現地の言葉や風習のみならず「心」を理解することが何より重要であると考えたからです。97年のIMF危機の際にも、制度を決して中止することがなかったのはそのためです。

日本では、どんなに小さな町や村でも、昔ながらの神社やお寺、道端のお地藏様に出会うこととなります。それは一体なぜなのか、日本中を歩きながら考えることで、少しずつ日本の心に近づけるようだとは言います。「良いも悪いもすべてが愛情になる」

と言うほど愛着深い土地への思いを胸に、帰国してから現地とサムスンの懸け橋として業務に励みます。その原点が、お世話になった日本の皆様への感謝にあることは言うまでもありません。精一杯の感謝を胸に、サムスンは今後も日本社会への貢献を目指して精進してまいります。

「サムスンからの手紙」へのご意見、ご感想を下記までお寄せいただければ幸いです。皆さまのお声をお待ちしております。

news letter 「サムスンからの手紙」に関するお問い合わせ

日本サムスン株式会社 戦略企画室 Social Relations Team
〒106-8532 東京都港区六本木3-1-1 六本木ティーキューブ
TEL:03-6234-2047 (広報直通) FAX:03-6234-2040
E-mail:pr-sjc@samsung.com URL:www.samsung.com/jp

記載されている会社名/製品名などは各社の商標または登録商標です。

SAMSUNG